

編集後記

『言語文化』第三十二号をお届けする。今年の特集は「ブルースと二十世紀」であり、フランス文学専門家に限らず、二十世紀の文学に関心を寄せる者にとっても極めて刺激的な論考が並んでいる。これは湯沢英彦氏（フランス文学科教授）と吉川佳英子氏（京都造形芸術大学）が中心になって企画され、二〇一四年五月十日に行われたコロックに基づく。コロックについては、湯沢氏の前説に詳しく解説されているので参照されたい。

特集以外の寄稿のうち、世界的なテノール歌手ジョン・エルウィス氏による「思い出のベンジャミン・プリテン」は、二〇一四年十月二十一日に本学芸術学科との共同主催で開催された氏のレクチャー・コンサートの講演内容の記録である。通訳及び翻訳は本学歴史資料館研

究調査員の加藤拓未氏による。また、樋口隆一氏（芸術学科教授）が中心となつて二〇〇八年から実施してきたワイマル音楽大学との交流事業の一環として、昨年秋季に若い研究者が二名来日し、講演をしてくださった。樋口氏の前説と共に、カイ・シャブラム氏による二つの講演「音楽の起源と発展について——一六〇〇年以前の音楽史記述における諸問題」（永島史恵訳）、「大形式」構想——十八・十九世紀における循環的交響曲の理論と実践への考察」（昇拓哉氏訳）、またベネディクト・シューベルト氏による「「らんよ——どこを——われらの罪を」、《マタイ受難曲》BWV24 冒険合唱の形式と内容への考察」（阿久津三香子訳）の講演内容の記録を収録した。ちなみに翻訳を担当してくれた三名は本学芸術学専攻博士後期課程在籍する大学院生である。

また、本学芸術学科の映像系列の専任教員が中心となつて、日本映画オーラル・ヒストリー・プロジェクトを開始した。

初回のインタビューは田口寧氏である。田口氏には、二〇一四年十一月十七日に芸術学科と研究所共催で開催された『シユウ・タグチと田口寧 作品上映と講演』に講師として御登壇頂いた。講演会当日には、田口氏の父親であつたドキュメンタリー映画監督シユウ・タグチ氏の作品『漁る人々』（一九五〇）、氏が製作した産業映画を二本（『巨大船を造る』『コルト・ファンタジア』）、氏の解説と共に上映し、山内隆治氏（日映映像東京支社長）にも解説をして頂いた。本学英文科卒業生である田口氏の講演会には、同窓生も多く参加された。日を改めて、芸術学科准教授の門間貴志氏とローランド・ドメーニグ氏が田口氏を訪ねて詳細なインタビューを行った。プロジェクトの説明についてはインタビューの前説に簡単な説明を載せているので参照して頂きたい。

次に、小林幸子氏（本研究所周員）は昨年に続き、論考「ワーグナーの《ロイバルト》『Wotan』とベートーヴェン」を寄稿された。また、「ホメーロス輪読会」

の講師である生田康夫氏にも引き続きホメーロス関係の論考を寄稿して頂いた。

二〇一四年度の本研究所のその他の活動について簡単に報告しておきたい。

五月二三日には、本研究所と芸術学科との共催、日本イスラエル親善協会、本学国際平和研究所、キリスト教研究所の後援で、ベン・アミー・シロニー氏（ヘブライ大学名誉教授）による『「アウシユヴィッツと広島」世界平和のためにユダヤ人と日本人がなすべきことは』と題された講演会が、樋口隆一氏の司会で行われた。氏は一九三七年ポーランド生まれで、四八年にイスラエルに移住、ヘブライ大学で歴史学の修士号を撮られた後、来日、国際基督教大学で日本語を学び、その後米国プリンストン大学で日本の歴史研究で博士号を取得され、ヘブライ大学東洋学部教授として四〇年間日本の文化と歴史について教鞭を執られた。流ちょうな日本語でシロニー氏はユダヤ人と日本人の歴史的、文化的相違点、及び共

通点を丁寧に説明しながら、イスラエルが国家として直面している「力」の限界を指摘すると共に、平和国家として歩んできた日本人が新たに直面している核の脅威や領土問題などに触れ、アウシユヴィッツと広島という悲劇を体験した両民族が未来への希望の実現に、さらに貢献していくべきだという強い提言をなされた。

十月二五日には、平岩健氏（英文学科学准教授）が中心となつて企画されたシンポジウム「Symposium on Number」が開催された。近年、理論言語学の分野で人間の数機能と言語機能の関係性が議論されるようになってきており、数(number)は現在最も注目されているトピックの一つである。本シンポジウムでは、生成文法理論を専門とする平岩氏、藤井友比呂氏（横浜国立大学准教授）、渡辺明氏（東京大学准教授）の発表に加えて、数学者で位相幾何学的グラフ理論の研究をされている根上生也氏（横浜国立大学教授）が発表され、それぞれの観

点から、numberのさまざまな側面に関する刺激的な議論が展開された。

二月一八日には、アートホールで「明治学院ケルティック・クリスマス」として「ふたりのイエイツ アイルランドの詩とハーブ音楽」のレクチャー・コンサートが本年も開催され、アイルランドを代表する詩人であり劇作家W・B・イエイツの研究者西谷茉莉子氏によるレクチャー、寺本圭佑氏（本学非常勤講師）によるアイリッシュ・ハーブの演奏とレクチャーが行われた。

二月五日には、中西裕一氏（日本大学教授、日本ハリストス正教会・東京復活大聖堂教会ニコライ堂司祭）による講演会「聖山アトスとはどのようなところか？ アトスの位置とその意味・ギリシヤ正教の人間理解と修道院について」が行われた。

二〇一〇年より、マイケル・ブロンコ氏（英文学科学教授）とポール・ハラ氏（英文学科学教授）が中心となり、英語教育と文化の関係をさまざまな角度か

ら考察する学会 *Liberlit Conference* を開催してきたが、二〇一五年二月十六日に第六回となる本年度の年次会議で、当研究所との共催により“Texts as Transformative Tools”と題された Ira Nadel 氏（ブリティッシュ・コロンビア大学教授）による招待講演が行われた。

最後に、二月一三日には、鄭秀婉（チン スワン）氏（韓国東国大学校映画映像学部副教授）が「戦後の小津安二郎の映画から見た殴られる女——『風の中の牝雞』（一九四八）と『宗方姉妹』（一九五〇）を中心に」というタイトルの講演を行った。鄭氏は日本映画を専門として、松竹の小市民映画の研究で知られるが、「男たちの暴力」という視点か

ら男女関係を通じて戦後の日本社会を読み直すテキストとして捉え、戦後の小津映画に新たな視点を加える刺激的なレクチャーをして頂いた。

また研究所では本年度も上述した「ホメーロス輪読会」の他にも、「読む短歌・詠む短歌」連作の楽しみ、「タイ語講座」、「古典ギリシア語」の中級・上級講座、「ラテン語初歩文法」などの活動が続けられたが、今年度は上野昂志氏による「小川伸介を読む」が新しく加わった。

以上、二〇一四度も所員、委員の皆さまも多くの方のご協力、ご尽力があり、例年通りに多彩な活動を行うことができた。また、前任の富山英俊氏（英文文学科

教授）から引き継ぎ、不慣れながらも何とか充実した内容をお届けすることができたのは、ひとえに執筆者と編集に協力してくださった方々のお陰である。そして、研究所職員の深澤比呂子さんにも大変お世話になった。お礼を申し上げたい。

最後に、長年芸術学科教授として本学の研究・教育に関わり、芸術学科の発展に大きく寄与し、文学部長も務められたことのあるバツハ研究の第一人者である樋口隆一氏は、当研究所の委員としても、さまざまな形で研究所の活動に関わっていらしたが、本年三月をもって退職される。本号でも樋口氏の活躍と存在感は一目瞭然であるが、氏の長年に亘る有形無形の貢献に深く感謝したい。（斉藤綾子）